Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2014, Vol.23, 95-102

論 文

中学校英語教育教材としての米国文学作品
－大学学部教育におけるテクスト選定作業を中心に

千代田　夏　夫〔鹿児島大学教育学部（英語教育）〕

American literature as a method of English education at junior high school
：Selecting literary works at college

CHIYODA Natsuo

キーワード：英語教育、米国文学、中等教育、高等教育、教材

・はじめに

本稿では中学校における英語教育において米国文学作品を取り入れる可能性を探るべく、筆者が2013年度前期、鹿児島大学教育学部において担当した「英語科指導法II（英米文学）」（法文学部との合同講義）のレヴューを中心に論じてみたい。具体的には、中学３年生対象の授業を想定した本講義において表出した、教材として米国文学作品を選定する際の問題点について論じる。なお最初に、大学学部英語教育教材としての米国文学についての研究は本稿でも参照するように先例があるが、中等教育における英語教材としての米国文学作品導入の可能性、また大学学部教育において当該問題を扱うことについての先行研究はほとんど見られないことを附言しておく[1]。

文学作品というくくりを設定しても、各種ジャンルが存在する。本講義では韻文/散文に関しては散文、フィクション/ノンフィクションに関してはフィクションにまず範囲を絞った。しかしそのフィクションでも分野は短編小説、長編小説、戯曲に大別され、またそれらの全文か一部か、また用いるのは原典そのままかretold versionかという選択肢が多く現れてくる。もちろん目下の学習指導要領[2]に拠った中学３年生の英語技能に見合ったものであることが重要であるが、文学という特殊分野ゆえにそればかりに拘泥して範囲を安易に平易な作品に限ることは厳に戒めることとした。

筆者は担当教員として、長編の一部分を使う場合と短編を全編用いる場合、二例を示すことから学期を始めた。指導案の厳密な書き方等の教授は英米文学専攻の教員が担当する場合本講義では求められていないため、まず教材となりうる英語文学作品の可能性の広さを示す意図であった。第一はF. スコット・フィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald, 1896-1940）の*The Great Gatsby*（1925, 以下*Gatsby*と略す）の冒頭第１章の一頁強[3]、二作目はアガサ・クリスティ（Agatha Christie, 1890-1976）の連作短編集*The Thirteen Problems*（1932）より“The Blue Geranium”[4]を選定した。また*Gatsby*については内容を簡易に書き換えたretold versionの該当箇所[5]も配布し、原典と編集版との相違を示した。

（1）テクスト選定作業の産物

The Great Gatsby は E. ヘミングウェイ、W. フォークナーとともに1920年代モダニズムの米国文学

---

1 大学教育以前の英語教材における英米文学作品の扱いの歴史については、江利川春雄『日本人は英語をどう学んできたか－英語教育の社会文化史』(研究社、2008) とくに第３節「英語教科書の文学作品」pp. 74-85を参照。「学習指導要領が定めた語彙の上限（中・高の合計）は、1951年の6, 800語程度から1998・99年の2, 700語程度にまで下がった」(81) との記述は注目に値する。

2 文部科学省『中学校学習指導要領』平成20年３月告示（東山書房、2008）

3 F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (London: Wordsworth Classics, 2001), pp. 2-4.

4 Agatha Christie, "The Blue Geranium," in *The Thirteen Problems* (London: Harper, 2002), pp. 131-155.

5 F・S・フィッツジェラルド、『The Great Gatsby グレート・ギャツビー』(IPCパブリッシング、2006)、pp. 2-5.

を代表するフィッツジェラルドの代表作である。また1920年代モダニズム文学は、19世紀中葉エマソン、ソロー、ホーソーン、メルヴィル、ホイットマンの五人を中心として国民文学が花開いたアメリカン・ルネサンスと並ぶ米国文学の華[6]であることも選定対象となった理由である。アメリカでは通常高校生までに読む国民的作品であり日本でも大学学部レベルにおいて取り上げられることの多い作品である。換言すれば日本における高等学校までの英語教育の成果で読みこなせる英文で構成されているものである[7]。なお本講義が開講された2013年前期はその６月にレオナルド・ディカプリオ主演で39年ぶりにリメイクされた同作の映画版が公開されるという時期に当たっており、その話題性も考慮に入れての選択であった。後者は英国文学、それも純文学ではなく娯楽小説の範疇に入るものではあるが、ミステリという、読む行為自体に楽しみを見いだせる素材として提供した。なお対照的な二作品をまず担当教員が示したことについて学生諸氏と議論を交わす中で、純文学／大衆文学（娯楽小説）という二分法、もしくはその合間に存すると（かつては）言われていた中間小説[8]等々の用語についての考察を深める好機も立ち現われてきた。

この二例はもちろん理想的な雛型としてではなく、本講義の前提である中学３年生の英語の授業の教材という枠に適当か否かについての判断・議論をまず促し、次いでより適切な素材選定への足掛かりとしてもらう意図ゆえのことであった。*Gatsby*は読みやすいとはいえ筆者が配布した冒頭部分だけは大学学部生レベルでも難儀するものであったので、あくまでも叩き台としての意味が大きい。そもそも本講義受講者の構成[9]においては英語文学そのものに慣れていない学生がほとんどであり、彼らが中学３年生を担当する英語教師として文学作品を、最終的には模擬授業で扱ってゆくという「二重構造」が本講義の面白さでもあり難しさでもあったのである。そこに担当教員としての筆者の砕身もあった。当該クリスティ作品もまた、十三人の客人が毎火曜日にそれぞれ謎を持ち寄って他の客に解かせるという構造ゆえに語りの次元、時制等において断絶が生じており、単純に読み進められるものではない。筆者はミステリの短編ということで読みやすさばかりを念頭に置き第一の教材試案として提案したのだったが、はからずも「話法」の問題にまで立ち入る結果となった。これは一人称小説も数多く存する米国文学の中でも特に語り手ニックの「信頼性（reliability）」が大きなテーマとなる*Gatsby*においても、同様に大きな問題である。

筆者が用意した二作品はいずれも難しすぎるとの結論にクラス全体で至った。一学期間で二回のローテーションを組むこととし、一巡目二巡目の班分けを筆者がくじによって行った後、作品選定から学生諸氏にまずは任せ、講義中は筆者が巡回しながらそれぞれの班で候補に上げられている作

---

[6] 19世紀当時に彼ら自身がアメリカン・ルネサンスという語を用いたことはなく約100年後の1941年、F. O.マシーセンが自著においてこの語を用いて五人の作家を論じたのである。F. O. Matthiessen, *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman* (London, Oxford, New York: Oxford University Press, 1941).

[7] 大学英語教育において*The Great Gatsby*を取り入れることへの考察としてはFuyuhiko Sekido, "An Effective Way to Use *The Great Gatsby* in the Language Classroom"（Liberlit Conference, February 2013）を参照。http://www.liberlit.com/proceedings-and-papers 2013/8/21アクセス。大学英語教育学会第52回国際大会全体シンポジウム（於京都大学2013/8/31～9/11）における佐々木徹日本英文学会会長の提言「文学と語学教育－共感とコミュニケーション」における「近年「コミュニケーション能力」がしきりに云々されるが、文学作品を読むという行為は作者と読者の間のコミュニケーションに他ならず、文学を教えることはコミュニケーション能力を高めることにつながるはずである」（大会Proceedings, 13頁）にも改めて注目したい。

[8] 斎藤美奈子は三島由紀夫を稀代の風俗作家と賞賛しその中間小説の再評価を提言する。斎藤美奈子『文学的商品学』（文藝春秋、2008）、pp. 52-3.

[9] 教育学部の３年生は国語専攻、社会専攻、理科専攻が各１名ずつ、教育学専攻が４名、英語専攻が５名。但しこれら５名も英米文学専攻ではない。法文学部人文学科からは８名、うち２年生１名３年生３名４年生４名。加えて既に大学院博士課程も終了し学位も得ている理学部の大学院生が１名、計21名のクラスであった。

品に適宜コメントを付すこととした。ここで注意したのは否定的なコメントを付けないということである。中学３年生レベルの英語という枠に拘りすぎて安易な作品選定に陥らぬように注意したことは既述の通りであるが、作品がたとえば大変に難解なものであってもそれは指導の仕方次第であり、筆者としてはテクストの異同（ヴァリアント）が大きな問題となる作品や、使用されている英語が南部英語など特殊である場合などに特に積極的に介入した。実際、学生諸氏が選んだ作品にはヘミングウェイの前年の*in our time*と混同される可能性のある*In Our Time*や南部英語に満ち満ちたマーク・トウェインの作品が挙がってきていたのである。このような作品選定を通して、文学作品を扱う場合のテクスト（版）選定の重要性、また非標準的英語を対象とする場合の対処の仕方―トウェインの場合は*American Dialect Dictionary*等の使用―にまでごく自然に議論を深められたのは、作品選定をすべて学生諸氏に任せたことに鑑みて望外のことであった。

(2) 作品例

以下、班分けののち学生が自主的に選定した作品について、それを教材とした模擬授業の手法とともに述べる。中学３年生という対象学年は共通であるが、作品選定、授業の準備を通じて最終的に本講義中にプレゼンテーションとして行う模擬授業においては想定する学期、授業の回数などはそれぞれの自由裁量に任されており各班によって相違がある。ただし本講義における模擬授業は30分を目安に行ってもらったため、例えばある文学作品全編を複数回の授業で扱うという計画であっても作品一部分のみの発表になることは必然であった。各グループとも紙芝居を使ったストーリー説明、オーディオ機器によるリスニング、会話部分の演技[10]など模擬授業の進行形態そのものには共通するところが多く、その中で本論ではテクスト選定というテーマに鑑み、学生諸氏が気づかずに（あるいは時に気づきつつ）提示することとなった教材としてのそれぞれの作品の問題について論じたい。

(2)－１．O. Henry,“The Last Leaf”（1907）

日本でもことに外国文学そのものへの入門的作品として知名度の高い短編である。O. HenryはWilliam Sydney Porter（1862-1910）のペンネームである。我々が親しんでいる作家名が実名とは異なるペンネームであるということは後述のマーク・トウェインの件然り往々にしてあることであり文学を取り入れる際にはこのことも附言しておきたい。ヘンリー作品は中学・高等学校の英語の教科書にもオリジナル、retold版問わずよく採用されているため、その点でも本講義にもっとも馴染みやすい作品と思われた。当該グループはオリジナルを平易な英語に編集しなおしたretold版を用い、病床のジョンズィが蔦の葉にわが身をなぞらえ一夜を明かすもいまだ葉の残っているのを発見するという、見開き２頁分の箇所を教材として配布した。きわめて短い英文ながら“the leaf hanging from its branch against the wall”“[T]he rain still beat against the windows”という二か所における前置詞againstの用法・ニュアンスの違いが担当教員である筆者側の指摘対象となった。すなわち“[t]oward and into contact with”（OEDA. III-6.）「…にもたれ[寄り]かかって」（ランダム4-(2)）という意味と、より一般的な、しばしば抵抗や暴力のニュアンスを含む“[in]hostility or active opposition to”（OEDA. III-12. a.）「・・・にぶつかって、あたって、こすって」（ランダム4-(1)）が同一段落で現れているということである[11]。本作における蔦のようにつる性の植物についての英語の用法においては、ともすればブドウのイメージばかりが前面に出がちな“vine”の語の理解など、日本語との区別をしっかり持つこと

---

10 英語劇そのものをより積極的に取り入れた事例に関しては丹羽佐紀「劇を取り入れた英語授業の試みについての一考察－効果と課題を探る－」（『鹿児島大学教育学部実践研究紀要』第22号(2012)、pp. 75-81）を参照。

11 *Oxford English Dictionary Second edition on CD-ROM Version 4.0*（Oxford University Press, 2009）および『ランダムハウス英和大辞典』第2版（小学館、1994）の“against”の項。

が必要であり、それが直接中学３年生に教える内容ではなくとも、教員側にはその知識が求められることが確認された。中学３年生に教える教員とそれを指導する教員（筆者）という二重構造を先に記したが、中学３年生に教える必要はなくとも中学３年生の英語を担当する教師が知っておくべき内容という二重構造もまた存在するのである。

(2)-2. Ernest Hemingway (1899-1961), “Indian Camp” (1924)

本作はヘミングウェイの最初期の短編であり同時に最もよく知られた佳作の一つである。当該グループが模擬授業で用いた個所は原文テクストであり、作品の終盤、インディアン夫婦の夫の自殺、妻の出産、そして一緒にいたはずのジョージおじの消失を含むニック少年とその父親が帰途に就く小説最後までの箇所である。“Do many men kill themselves, Daddy?” につづく、女性は自殺しないのかという問いについての「下線部(2) “Don’t they ever?” には省略されている部分があります。何が省略されていますか？英語で書きましょう」（ママ）というワークシートの設問は、ヘミングウェイの文体の真骨頂である、作家独自の氷山理論[12]に基づく「省略」を前景化したことで、単なる英文読解にとどまらぬ文学へのアプローチの可能性を示しており、高く評価されるべきものである。また極めて平易な英文で書かれながら夫の自殺、おじの消失など専門的ヘミングウェイ研究においてもいまだ議論がし尽くされていない大きなテーマ[13]にごく自然に学生／生徒が誘導されることも当該グループ発表の優れた点であった。“bunk” “shanty” “stern” などの特殊な用具を指す語については注を付し、あえて原文に触れさせるのはやはり文学を授業に取り入れる一番の醍醐味であろう。なお喉を掻き切って自殺しているインディアンの夫をニック少年の父親がその手に血を受けながら発見する場面 “[Nick’s father] pulled the blanket from the Indian’s head. His hand came away wet.” はヘミングウェイのハードボイルドな筆致と相まって衝撃度の高いものであり、中学３年生という対象年齢に鑑みてその適切さが問われたが、文学が必然的に持っている「毒」としてそのままに扱うことに、筆者と学生諸氏とのあいだで了解が得られた[14]。

(2)-3. Issac Asimov (1920-1992), “Liar” (1950)

アシモフのロボットものとしては第一短編集となる *I, Robot* (1950) 中の作品である。アシモフはサイエンス・フィクション（SF）の第一人者であり、作品中の「ロボット工学三原則（Three Laws of Robotics)」はSFの範囲を越えて後世に広く影響を与えたが、サイエンス・フィクションは文学研究の場において、まだまだ真剣な研究対象とはされておらず[15]、筆者自身不慣れな領域であったが、それゆえに刺激的な選定であった。ま

---

12 「「氷山理論（原理）(iceberg theory, iceberg principle)」はヘミングウェイの小説作法を語る言葉として最も有名なものである―中略―ヘミングウェイは『午後の死』第十六章を「書こうとしていることを作家がよく知っていれば、それを敢えて書かないことで作品により高い効果を付与できる。氷山の動きに威厳があるのは、水面下にあって見えない氷山の八分の七があるからだ」という主旨の文章で結んでいる」(『ヘミングウェイ大事典』pp. 759-60、「氷山理論/原理」の項)。執筆者の熊谷順子はこの技法による代表の一つとして「インディアン・キャンプ」のジョージおじの不可解な行動を挙げる。

13 関真彦は「ジョージおじ(Uncle George)は、おびただしい数の先行研究において、十分に光を当てられてきたとは言いがたい」と指摘する。関真彦「境界に立つジョージおじ―「インディアン・キャンプ」における二つの家族」(『駿河台大学論叢』第43号 (2011)、pp. 63-75)

14 文学作品を日本の大学教育において「「文学教材として教える」のか、「英語教材として教える」のか」という問題について関戸冬彦は後者に焦点を当てつつヘミングウェイ作品を例に論じている。関戸冬彦「英語教材としての文学作品の可能性―ヘミングウェイ作品の場合―」(『横浜国立大学　大学総合教育センター紀要』第１号 (2011)、pp28-35)

15 アメリカ文学研究者の巽孝之などはSFについても本格的学術的な批評活動を行っている。

た「嘘つき！（Liar!)」という作品名が人間関係の複雑さに自意識を高まらせてゆく中学３年生の年頃に訴えかけるものも大きいと考えられる。SFは熱狂的ファンも多い面、関心を有さない層にはアピールしない弱さをもつ。その点で古典的巨匠であるアシモフの作品は、登場人物こそロボットというSFを代表する存在ではあるものの、基礎的論理思考の涵養と表裏一体をなす「ロボット工学三原則」に基づく一種のラブ・ストーリー展開を持ち、平易な英語による明晰な文体によって構成される本作は、先に見た純文学/大衆文学の二項対立について再考察することの重要性同様、文学のジャンルに対する先入見を外すという点でも有益なものと考えられた。模擬授業ではロボットのハービィが三原則に抵触せぬように発話を行いつつ嘘をついてしまう原文見開き２頁の場面が教材として配布されたが、このハービィは「読書好き」という設定であり書籍が“fiction”という語で示されている点に、「物語/小説－虚構－嘘」というリンクを見いだせる点でも議論の深まる可能性を見ることが出来た。

(2)-4. Ernest Hemingway, The Old Man and the Sea（1952）

ヘミングウェイの晩年を代表する長編であり、昨今ヘミングウェイ研究者の間では従来のように無条件に名作とするか否かの議論が活発になされている問題作でもある[16]。この作品を全編、授業時間を全18時間に設定し、最終的に文化祭で英語紙芝居による発表を目指す、という設定を組んだのが当該グループであった。紙面で読むという次元から、対外的な目標を設定することで作品を文字通り「立ちあげる」試みである。原典の長編を一編そのまま教材として取り組むということの物理的な問題については、映像化されている作品のDVD鑑賞により内容を正しく把握する一助とするなどの工夫が見られた。そのような助けはありながらも原文で長編を読み、そしてそれを紙芝居に「組み直し」台本を作成し、「英語による」発表を行う、という四技能はもちろんそれ以上の要約能力等が問われる授業案であった。18時間という設定時間数をはじめ仮定事項が多かったためどこまで実現可能かは本講義では明らかにはならなかったが、当該グループにおいて何よりも注目すべきは米国文学の長編を原文のまま一編用いるという大胆な発案である。そしてここでも長編の小説を台本化して－一種の戯曲化ともいえよう－紙芝居に作成し直すという、クロスジャンル的な様相が見られたことに注意したい。義務教育課程の英語教育に文学作品を導入することによって、純文学・大衆文学・SF等のジャンル区分そのものへの疑義提示等、新たに見えてくる地平が確かに存在すると、認識をあらたにするものである。

(2)-5. Erskine Preston Caldwell(1903-1987), “The Strawberry Season”（1930）

短編集 *American Earth*（1931）所収の作品であるが、若年層向けの英語の読み物として日本でも親しまれてきた作品である。模擬授業では語り手“I”が幼馴染のファニーに“strawberry-slap”を行って彼女の胸部をはたいたところ、いつものように笑ってやり過ごさず痛みを訴えたという箇所が原文のまま配布された。苺の赤とファニーの肌の白、そしてつぶれた苺の生々しさなど色彩・量感ともに「性」を強く意識させる箇所であるが、当該グループは敢えてセクシュアリティを読み込むことを行わなかった。「ファニーはなぜ今回はいつものように笑わなかったのでしょうか」（ママ）というワークシートの設問に対して当該グループが用意した模範解答は「ファニーが語り手である少年を好きだったから」というものであった。しかし“[I] dropped a great big juicy berry down the open neck of her dress”“I had slapped her breasts”“You mustn’t hit me there”“The scarlet stain looked like a morning-glory against the white cloth”等、配布された見開き二頁に満ちる性の含

[16] 2012年5月熊本大学黒髪北キャンパスにおいて開催された九州アメリカ文学会第58回大会の「ヘミングウェイと老い」というシンポジウムにおいてパネリストの千葉義也、今村楯夫、高野泰志、光冨省吾各氏のあいだで激しい議論が広げられた。

意を読み取ることは不可避のトピックであり[17]、ファニーが痛みを訴えたのは心の痛みに加え、第二次性徴期を迎えた繊細な身体の受けた暴力の痛みでもあったはずである。筆者がそれを指摘すると中学3年生という年齢から照れが生じるであろうという推測ゆえに性的な読みの提示は避けたとのことであったが、この作品は少年少女の性の目覚めとその身体の変化について行き切れぬ心の繊細な動きを描いたところにその文学的眼目があるのであり、やはりその読みを外すべきではないであろうとのコメントを敢えて担当教員として行った。先述の“Indian Camp”でも自殺とその描写の許容性について議論があったことを記したが、死、性など通常の言説ではタブーとされがちなものが主題となるのが文学であり、それらについて考察を行う好機を得ることこそ、英語の授業に文学を取り入れる利点である。なればこそ、「泥をかぶる」のは教師の仕事である－この場合は生徒側が照れるのなら教師側が性的な読みを提示するなど－ということも、教師は自覚しなくてはならないということを、本稿において繰り返し述べている「大学教員－大学生」「大学生－中学教員」の二重構造の中で議論を行っている本講義において確認したのである。なお配布された箇所にはなかったがこの作品中にも“The Last Leaf”同様“vine”という単語が現れる。この場合も苺の苗が有する蔓の部分を指しているのであり、日英両語における教師側のしっかりした認識が求められる。

(2)-6. Ernest Hemingway, “Cat in the Rain”(1925)

In Our Time（1925）所収の著名な短編であり、映像化もなされている。ただし当該グループのおかしたミスもあったが、前年の1924年パリで170部出版されたすべて小文字で記される*in our time*との混同を避けなくてはならない。文学作品を扱う以上、初出、単行本収録および出版年、テクストの異同等には細心の注意を払うよう本講義でも指導していたが、ヘミングウェイのこのケースは英米文学専攻ではない学生がおかしやすい間違いではあった。模擬授業ではヘミングウェイの離婚・再婚歴を小説に重ねて読むという進行がなされたが、ともすれば離婚を否定的にとらえているとも聞こえかねないコメントの付け方が見受けられたので、発表者たちには全くそのような偏見はないがゆえに、一考を促した。様々な「家庭」－このような既成概念自体を問い直すことも文学の大きな役割である－の事情の生徒がいる以上、過敏になりすぎるということはない。この点は先述の自殺、死､性などとは逆に、用心深くありたいというトピックであった。文学を扱う際には作家の伝記的要素に触れることも必須の事柄である。ヘミングウェイの場合特に彼の人生が作品に投影されている部分が大きく、当該グループも作家の遍歴を作品に読み込む解釈を行ったと思われるのであるが、作家の人生とその作品をどこまで結びつけて読むべきか読み得るかは専門的文学研究の場においてもデリケートな問題であり、やはり注意せねばならない。中学校における英語教育の教材選定能力の涵養が第一の目的である本講義ではあったが、そのまま専門の文学研究のフィールドにまで繋がる問題が自然に立ち現われてくることが筆者にとっては驚きであった。なおコールドウェル作品からさらに発展した形での性の問題ということにもなるが、倦怠感に満ちた夫婦の会話が主幹をなす本作－配布箇所も二人の不毛な会話が主となる原文からの場面であった－中の、“I get so tired of looking like a boy”という妻の台詞からジェンダーの揺らぎを読み取ることは十分に可能であり、そこにヘミングウェイ自身のセクシュアリティの曖昧さ、遺作として死後二十五年を経て出版された『エデンの園』（*The Garden of Eden,* 1986）にはっきりと示された同性愛や両性愛の表象と繋げて議論をしてゆくことは、異性愛中心主義体制の中で揺らぐ性の苦しみを表出できない、まさに本講義が対象とした15歳前後の青少年にとって非常に重要なことでもあろう[18]。

---

17 たとえば大野充彦「天地の鼓動－アースキン・コールドウェルの「いちごの季節」について－」（『滋賀大学教育学部紀要　人文科学・社会科学』No. 47（1997）、pp. 1-8）を参照。

(2)-7. Mark Twain (1835-1910), "A Dog's Tale" (1902)

短編としては分量の長い作品であるが、筆名マーク・トウェインこと本名サミュエル・ラングホーン・クレメンズ（Samuel Langhorne Clemens）による佳作である。犬が語り手になっているという設定も教材として生徒の興味をとらえやすい。しかしそれは単なる読者受けを狙ったものではもちろんなく、必然性あってのことであるということが、動物実験という非常に深刻なテーマとともに浮かび上がることとなり、より高い次元で中学生向け英語教材としての文学作品として誠に適切なものといえるのである。トウェインを読む場合南部英語の扱いが最も初歩的かつ重要な問題となる。当該グループの模擬授業における原文の配布箇所にはほとんど南部独特の用法は見受けられず、多く付された注も標準的英単語についてのものばかりであるが、南部英語に対応するには *American Dialect Dictionary*という辞書を用いるという点、換言すればこの一冊でかなりの部分が助けられるということを指摘できたのはトウェインを教材として選んだ学生諸氏のおかげである。そもそもその英語、独自のユーモアをもって「日本人が最も研究対象にしてはならない作家」と言われているトウェインであるが、同時に日本人には若年層を主として『トム・ソーヤーの冒険』『ハックルベリー・フィンの冒険』の二作を代表格に広く読まれている作家でもあり、少年ものとはまた異なったトウェインの味わいを十代の時期に味わうという点でもよい選択であると言える。計画では全３時間で一編すべてを読むとのことであったが、単に注を大量に付けて原文で原著を読む助けとするという以外に工夫のほしいところではあった。

(2)-8. O. Henry, "The Gift of Magi" (1906)

「賢者の贈り物」の訳で「最後の一葉」と同じく日本人に馴染みの深い作品である。しかし今回改めて認識したことであるがヘンリー作品の英語は難しい。馴染みの深さを英語の分かりやすさと錯覚して原典を不用意に読ませることには注意しなくてはならない。当該グループは夫ジムが贈った櫛がプレゼントとして妻ベラの手許に現れる場面を配布したが、"an ecstatic scream of joy" "a quick feminine change to hysterical tears and wails" と記されるデラの描写には「恍惚/ヒステリー/情緒不安定－女性」という十九世紀的な構図が露わになっており、ジェンダー・バイアスの強さがうかがえる[19]。換言すれば単なる教訓めいた寓話として認識されがちなヘンリー作品にはまだまだ追及するテーマがふんだんにあるということである。先述のジェンダーの揺らぎと連関してこのような箇所に焦点を当てれば中学３年生でも対応可能な問題であろう。またワークシートの「DellaとJimは、作者が述べるように「賢者」でしょうか？それは、なぜですか？」（ママ）という設問には、クリスマスに贈り物をするということの重要性、そのことに持てるすべてをつぎ込むことの客観的妥当性、そもそも設問自体に当該グループがカギ括弧を付した「賢者」という語の定義等々について、本講義受講者全員が小一時間意見を述べ合うこととなった。特に客観的に見れば全く意味のない事態を引き起こしたジム・デラ夫婦が「賢者」であるか否かについては、「勇者」「聖者」等の語・概念との置き換えも試みられ、思索を深めることとなった。また賢者と訳されることの多い題名"Magi"が、聖書中の東方の三博士やマギ族およびペルシアの拝火教の僧侶階級等「東方（orient)」の意味を有すること等を含め、米国文学を教材に取り入れるにあたっては、キリ

---

18 大学学部教育における本作の扱い方においては2010年5月1日日本英文学会関東支部5月例会ワークショップ「その素材、どう料理する？―教材徹底討論」グループ1において上西哲雄、小笠原亜衣、関戸冬彦、フェアバンクス香織、深谷素子、田村恵理氏ら12名が対訳版なども考慮しながら論じている。http://www.elsj. org/gakushu/_userdata/2. pdf　2013/8/21アクセス。

19 当該作品の最新邦訳である柴田元幸訳「賢者の贈り物」ではこの原文の筆致がよく映されている。『柴田元幸翻訳叢書　アメリカン・マスターピース古典篇』（スイッチ・パブリッシング，2013)、p. 219.

スト教についてそのパレスチナ起源から改めて知識をしっかり有しておくことが必要との認識に達した。

(2)-9. Daniel Keyes(1927-), *Flowers for Algernon* (1966)

『アルジャーノンに花束を』の訳で日本でも親しまれている戯曲作品である。上に述べてきた作品群が皆小説であったのに比し、戯曲それも長大な作品を選んだ意欲的な当該グループであった。日本でも劇団昴等の舞台で上演され、2002年には設定を日本に置き換えたTVドラマも放映された。繰り返し記すが、このように生徒に親近性を感じさせる教材選択を行うことは極めて重要である。本作は登場人物が台詞を述べ合う通常の戯曲ではなく、報告書形式で構成されている。そして知的障害者に対するロボトミー手術という深刻なものである。模擬授業では術後知能が向上してゆく二日間にアルジャーノンが綴った報告書二葉を原文のまま教材として配布したが、間違ったスペリングや文法、そしてそれをおかした人物自身がそれに気づき訂正してゆく過程が「文学」として眼前に供される新鮮さは他作品では代替不可能なものであった。通常「正しいもの」として現れる教材に間違いが織り込まれているという逆説的なアプローチは、文学というもの自体の一つの核心を突いた試みであったと言える。「前頭葉白質切開（prefrontal lobotomy）」すなわちロボトミー手術が華々しく行われていた1950年代米国の時代背景を如実に描き出すものとしても本作品を取り上げる意義は大きい[20]。なお折しもオバマ合衆国大統領が次期駐日米国大使にJ. F. ケネディの長女キャロライン・ケネディ氏を指名した時期であった。キャロライン氏の叔母にあたるJ. F. ケネディの妹ローズマリー・ケネディ氏はロボトミー手術の被害者として広く知られており、タイミングが重なったとはいえ、米国文学の背景にある米国社会の明るからぬ部分にも目を向ける成り行きとなった。それは米国文学を扱う際には前述のキリスト教の知識が必須であるということと同根のものであろう。

・おわりに

英米文学専攻ではない受講者たちを中心に、米国文学を英語教育教材として取り入れる可能性を探ることは、「実際の大学学部の授業」と「想定される中学校での授業」、また前者の受講者が後者では教師になるという幾つかの「二重性」に絶えずさらされている点で、意識をしっかり持ってその都度役割を認識することが不可欠であった。しかしそれは同時に大学学部レベルでの文学教育/研究と中学校レベルでの文学の取り入れの両者が決して断絶した二項ではなく、長く広く繋がっていることを認識する好機でもあった。そもそもジャーナリスティックな或いは教科書向けに書かれた英文ではなく、文学を教材として読むということについては、両者の行為自体は同じものである。ときに学部生の等身大の立場で取り組み、ときに数年前の中学生時代の自分を思い出しながら目の前の英語を読んでみる、その早変わりのような受講態度がよいブレイン・ストーミングの効果をももたらし、専門的な学術研究の現場においてさえなおざりにされがちな「純文学とは何か」「大衆文学は教育機関で読む対象にはならないのか」といった大きな問いに、身構えることなくごく自然に向き合う次第ともなったのである。そしてそれが具体的な授業案、模擬授業のプレゼンテーションとして、例えば長編の散文作品を戯曲化の上紙芝居にまで「変形(transform)」させるというような柔軟なクロスジャンル的態度も生じたのである。中学校の英語教師として米国文学を教材に取り入れるとすればどのような作品選択を行うべきか、というテーマのもとに一学期開講した授業ではあったが、本稿で何度も記してきた「二重構造」の中を行き来する中で学生諸氏は単なる指導法技能の習得を越えて「文学とは何か」という、根源的な問いに近づいて行ったように思われる。

---

20 松永千恵子「文学に見る障害者像　ダニエル・キイス著『アルジャーノンに花束を』」（『ノーマライゼーション　障害者の福祉』2003年8月号、pp. 38-41）